

## ドイツ語命令形の形態について

### － 2 人称単数の e 付き、e なしの問題を中心に －

鈴木康志

キーワード：ドイツ語、命令形の形態（e 付き、e なし）、語末音消失（Apokope）、語末音添付（Epithese）、言語的経済性（die sprachliche Ökonomie）

要 約：ドイツ語では、2 人称単数の命令形だけが、独自で、－(e)st の語尾をもつ直説法や接続法の 2 人称単数形と区別される。古高ドイツ語（750～1050年）では弱変化動詞の 2 人称単数の命令形は -i, -o, -e というテーマ母音で終わるのに対して、強変化動詞は子音で終わる。古典期の中高ドイツ語（13世紀）においても強変化動詞の語尾なしは同じであるが、弱変化動詞は -e に統一される。初期新高ドイツ語（1350～1650年）では、一方では語末音消失により弱変化動詞に -e なしが、他方では語末音添付により強変化動詞に -e 付きが現れるという混乱の時期に入り込む。ルター の 1545 年の聖書訳は -e 付きで、その後 2 人称単数の命令形は (i)e 型の動詞を除き、-e をつけるのが書き言葉では一般的になるが、言語的な経済性の傾向から特に話し言葉などでは -e が省略されることも多く、現代ドイツ語では (i)e 型動詞の -e なし、-dm, -tm, -gn, -chn 等で終わる動詞の -e 付きを除くと、-e 付き、-e なしのどちらでも用いられる動詞が多い。これを Donhauser (1986) は異なる形成原理に基づく二つの形態と考える。

#### 1. 古高ドイツ語（750 ～ 1050 年）における命令形の形態

ドイツ語では、2 人称単数の命令形だけが、独自で、－(e)st の語尾をもつ直説法や接続法の 2 人称単数形とはっきりと区別される形態をもっている。それは古高ドイツ語においても同じである。ただし、現代のドイツ語と異なり、古高ドイツ語では 2 人称単数の命令

形の形態は、強変化動詞と弱変化動詞との間にはっきりとした区別がある。弱変化動詞の 2 人称単数の命令形は -i, -o, -e というテーマ母音で終わるのに対して、強変化動詞は一部を除き、<sup>(1)</sup> 子音で終わる。例えば強変化動詞 *nēman* (*nehmen*) の直説法現在、接続法 I 式、命令形の語形変化は以下のようになる。<sup>(2)</sup>

(2)

ドイツ語命令形の形態について

			nēman (nehmen)
直説法・現在・単数	1 人称		nim-u
		2 人称	nim-is
		3 人称	nim-it
	複数	1 人称	nēm-umēs, -amēs, -emēs; (-ēm)
		2 人称	nēm-et (nēm-at)
		3 人称	nēm-ant
接続法・I 式・単数	1 人称		nēm-e
		2 人称	nēm-ēs
		3 人称	nēm-e
	複数	1 人称	nēmē-m, (-amēs, -emēs)
		2 人称	nēm-ēt
		3 人称	nēm-ēn
命令形	単数	2 人称	nim
	複数	1 人称	nēmamēs, -emēs; nēmēm
		2 人称	nēmet, (nēmat)

nēman のような強変化動詞の場合、2 人称単数の命令形は、直説法 2 人称単数 nimis から語尾 -is をとった形 nim である。また、複数 2 人称に対する命令形は、直説法と接続法 2 人称複数と同じ形態 (nēmet) であることがわかる。<sup>(3)</sup>

次に弱変化動詞をみてみよう。古高ドイツ語の弱変化動詞は語尾によって 3 つに区別される。第 1 類は -en、第 2 類は -ōn、第 3 類は -ēn の語尾である。同様に直説法現在と接続法 I 式の人称変化と命令形をみてみよう。<sup>(4)</sup>

		suochen (1 類)	salbōn (2 類)	habēn (3 類)
		(suchen)	(salben)	(haben)
直・現・単	1.	suoch-u	salb-ōm, -ōn	hab-ēm, -ēn
		2. suoch-is	salb-ōs, -ōst	hab-ēs, -ēst
		3. suoch-it	salb-ōt	hab-ēt
	複	1. suoch-emēs	salb-ōmēs, salb-ōn	hab-ēmēs; hab-ēn, -ēēn
		2. suoch-et	salb-ōt	hab-ēt
		3. suoch-ent	salb-ōnt	hab-ēnt
接・I・単	1.	suoch-e	salb-o	hab-e
		2. suoch-ēs, -ēst	salb-ōs(t)	hab-ēs(t)
		3. suoch-e	salb-o	hab-e
	複	1. suoch-ēm, -en	salb-ōm, -ōn	hab-ēm, -ēn (-ēmēs)
		2. suoch-ēt	salb-ōt	hab-ēt
		3. suoch-ēn	salb-ōn	hab-ēn

命	単	2. suochi	salbo	habe
	複	1. suochemēs, ēn	salbōmēs, salbōn	habēmēs, habēn, -ēēn
		2. suochet	salbōt	habēt

上記のように弱変化動詞の場合 2 人称単数の命令形では、第 1 類は suochi のように -i、第 2 類は salbo のように -o、第 3 類では habe のように -e といったテーマ母音で終わるこ

とになる。なお、複数 2 人称の直説法と接続法と命令形は同じ形態 (suochet, salbōt, habēt) である。すると古高ドイツ語の -e 付き、-e なしは以下のように図示される。<sup>(5)</sup>

	命令形の形成原理	強変化動詞	弱変化動詞
古高ドイツ語	語幹 ↗ テーマ母音なし (強変化動詞) ↘ テーマ母音 (弱変化動詞)	nīm ∅	
		biti, -i	suochi, salbo, habe -i    -o    -e

古高ドイツ語の具体的な命令文の実例をみてみよう。ここではオトフリート・フォン・ヴァ

イセンブルクの『福音書 (Evangeliēnbuch)』(9 世紀) からの例文である。<sup>(6)</sup>

- (1) Húgi weih thir ságeti, ni wis zi dúmpmuati, firnīm thesa lera,... (Otfrid: I, 3, 29 ~ 30, S.17)  
 私があなたに言ったことを考えなさい、あまりに愚かでないようにこの教えに耳を傾けなさい。
- (2) Bilido ío filu frám thesan héilegon man: (Otfrid: II, 9, 67, S.73)  
 この聖なる人をいつも手本としなさい。
- (3) Fernémet sar in ríhti, thaz Krist ther brútigomo si, (Otfrid: II, 9, 7, S.71)  
 キリストが花婿であることを素直な気持ちで聞きなさい。

例文 (1) の húgi は弱変化動詞 huggen (denken) の、wis は wesan (sein) の 2 人称単数に対する命令形、<sup>(7)</sup> firnīm は強変化動詞で firneman (vernehmen) の 2 人称単数の命令形である。例文 (2) の bilido は弱変化動詞 bilidon (nachbilden) の 2 人称単数に対する命令形、例文 (3) の fernémet は ferneman の 2 人称複数形に対する命令形である。不規則動詞 firneman の 2 人称単数に対する命令形が、語尾なし (firnīm) であるのに対して、規則動詞 (huggen, bilidon) の du に対する命令形は、テーマ母音の -i -o で終わっている。また複数形に対する命令形は直説法と同じ fernemet である。なお、

huggen のように子音が重複する場合は hug のように単純化される。(Braune / Eggers (1987: 264) 註 1 参照)

## 2. 古典期 (13 世紀) の中高ドイツ語における命令形の形態

中高ドイツ語は一般に 1050 年から 1350 年までを言うが、その中で古典期、つまり 13 世紀の中高ドイツ語においても強変化動詞の 2 人称単数命令形の語尾なしは同じである。例えば nemen (nehmen) と lâzen (lassen) の例でみてみよう。<sup>(8)</sup>

(4)

ドイツ語命令形の形態について

			nēmen (nehmen)	lāzen, lân (lassen)
直説法・現在・単数	1 人称		nim-e	lân, lâ
		2 人称	nim-es(t)	lâst, læst
		3 人称	nim-et	lât, læt
	複数	1 人称	nēm-en	lân
		2 人称	nēm-et	lât
		3 人称	nēm-ent	lânt
接続法・I 式・単数	1 人称		nēn-e	lâ
		2 人称	nēm-es(t)	lâst
		3 人称	mēm-e	lâ
	複数	1 人称	nēm-en,	lân
		2 人称	nēm-et	lât
		3 人称	nēm-en	lan
命令形	単数	2 人称	nim	lâ
	複数	1 人称	nēme(n)	lāzen
		2 人称	nēmet	lât

中高ドイツ語の強変化動詞 (nēmen, lāzen) の 2 人称単数命令形は古高ドイツ語と同様に直説法現在 2 人称単数 nimest, lâst から語尾 -(e)st をとった形である。複数 2 人称はやはり古高ドイツ語と同様に直説法と接続法と命令形の 3 つとも同じ形態 (nēmet, lât) で

ある。

次に中高ドイツ語の弱変化動詞をみてみよう。古高ドイツ語の弱変化動詞には 2 人称単数の命令形に -i, -ō, -ē というテーマ母音がついていたが、中高ドイツ語においては -e に統一される。loben と sagen でみてみよう。

			loben	sagen
直説法・現在・単数	1 人称		lob-e	sag-e
		2 人称	lob-es(t)	sag-est
		3 人称	lob-et	sag-net
	複数	1 人称	lob-en	sag-en
		2 人称	lob-et	sag-et
		3 人称	lob-ent	sag-ent
接続法・I 式・単数	1 人称		lob-e	sag-e
		2 人称	lob-es(t)	sag-est
		3 人称	lob-e	sag-e
	複数	1 人称	lob-en,	sag-en
		2 人称	lob-et	sag-et
		3 人称	lob-en	sag-en
命令形	単数	2 人称	lobe	sage
	複数	1 人称	loben	sagen
		2 人称	lobet	saget



中高ドイツ語 2 人称単数の命令形は、語幹に -e をつけた形で、現代ドイツ語とほぼ同じ形であると言える。複数 2 人称に関しては、や

はり直説法、接続法、命令形は同じ形態 (lobet, saget) である。図示すると以下のようになる。

	命令形の形成原理	強変化動詞	弱変化動詞
中高ドイツ語	語幹 ↗ 語尾なし (強変化動詞)	nim, lâ Ø	
	語幹 ↘ -e (弱変化動詞)		lobe, sage - e

中高ドイツ語の命令文の実例をハルトマン・フォン・アウエの『哀れなハインリヒ』

(1195 年) でみてみよう。<sup>(9)</sup>

- (4) Nû enhil mich dînes willen niht. (Der arme Heinrich 1083, S.84)  
あなたの本心を隠さないでください。
- (5) lâ mich bezzern lôn enphân. (Der arme Heinrich 634, S.46)  
私にもっとよい報いを受けとらせておくれ。
- (6) ...sage mir, wie bistû hiute ûf sô fruo? (Der arme Heinrich 908-9, S.64)  
...なぜ今日はそんなに早く起きたのか、わたしに言いなさい。
- (7) senftet iuwere riuwe,... (Der arme Heinrich 738, S.54)  
あなたの悲しみを和らげてください。

例文 (4), (5) の enhil (en+hil), lâ は強変化動詞 *heln*, *lâzen* の、sage は弱変化動詞 *sagen* の 2 人称単数に対する命令形、senftet は弱変化動詞 *senften* の 2 人称複数に対する命令形である。強変化動詞では 2 人称単数に対する命令形は語尾がなく、弱変化動詞の *sagen* の場合は -e がついていることがわかる。2 人称複数に対する命令形は接続法と同じである。

### 3. 初期新高ドイツ語 (1350 ~ 1650 年) における命令形の形態

古典期の中高ドイツ語にみられた、2 人称単数の命令形における強変化動詞の語尾なし、弱変化動詞の -e 付きという区別は、初期新高ドイツ語 (1350 ~ 1650 年) の時期には大きく崩れることになる。まず簡単に記せば、一方には弱変化動詞に -e なしが現れ、一方には強変化動詞に -e 付きが現れることになる。

この点に関しては Besch (1967: 306f.) の研究に基づいて記してみよう。Besch によれば、中高ドイツ語に見られたあの区別 (強変化動詞 → 語尾なし、弱変化動詞 → -e) は、14 ~ 15 世紀に語末音消失 (Apokope) と語末音添加 (Epithese) により、完全に混乱の時期に入り込む。Besch による 15 世紀の言語地図 (37 ページ)<sup>(10)</sup> は見る者を錯綜の時期に連れ込む。この地図によれば、中部ドイツ地域と北に面した地域 (85, 86, 88, 91a, 91b) は基本的には中高ドイツ語から受け継がれた規則がまだ有効である。ただ 87 と 89 に強変化動詞に -e が付くなどの揺れがある。南部ドイツはまったく異なっている。まず語末音消失の作用が明らかで、弱変化動詞の語尾の -e は取り除かれ、それによって語尾のない統一した命令形が生み出されている。(地図では○の箇所を参照) ただ、唯一 23 (シュトラスブル) だけはまったく別の方向を取り、すべてに -e をつけている。つまりこの

(6)

ドイツ語命令形の形態について

世紀は一部は語尾を省略し、一部は以前の語尾のままに、一部は類推により不必要な -e が加えられている。Besch によれば、今日 -e を付けない gib ですら、語末音添加の例外ではなく、23, 53, 54, 67a, 67a, 89 には gibe という表記があるということである。ルター (Martin Luther (1483 ~ 1546 年)) の場合

は興味深く、最初は南部ドイツ語のように -e なし、それから中部ドイツ地域に従う傾向がある。つまりルターは命令形を最初はおっばら -e なしで、後に特に 1545 年の聖書訳では -e をつけている。初期新高ドイツ語の場合を図示すると以下ようになる。  
(Donhauser (1986:65) 参照)

	命令形の形成原理	強変化動詞	弱変化動詞
初期新高 ドイツ語	語幹 + e 変化形への解釈	類推により Epithese (語末音添付 (-e)) へ → gibe	sage - e ⇓
	語幹 + ∅	gib ∅	Apokope (語末音消失) により ∅ へ → sag

具体的な例としてまずハンス・ザックスの

謝肉祭劇『熱い鉄』(1524 年) をみてみよう

亭主 → その妻

(8) Schweig vnd kein wort darwider sag !

黙れ、つべこべ言うな。

Flucks nimb das Eyssn, weil es ist heiß,

熱いうちにさっさと鉄をつかんで

Vnd trag es sittlich auß dem kreiß,

きちんと輪の外へ運び出せ。<sup>(11)</sup>

上記の一例からも伺えるように、ハンス・ザックスの謝肉祭劇『熱い鉄』では、強変化動詞はもとより、sagen のような弱変化動詞もすべて語尾 (-e) なしになっている。例えば上記以外でも schem, schaw のように弱変化動

詞にも語末音消失 (Apokope) が生じている。

逆に、語末音添付 (Epithese) の例として、ルターの 1545 年の聖書訳の中からヨハネによる福音書の箇所をみてみよう。<sup>(12)</sup>

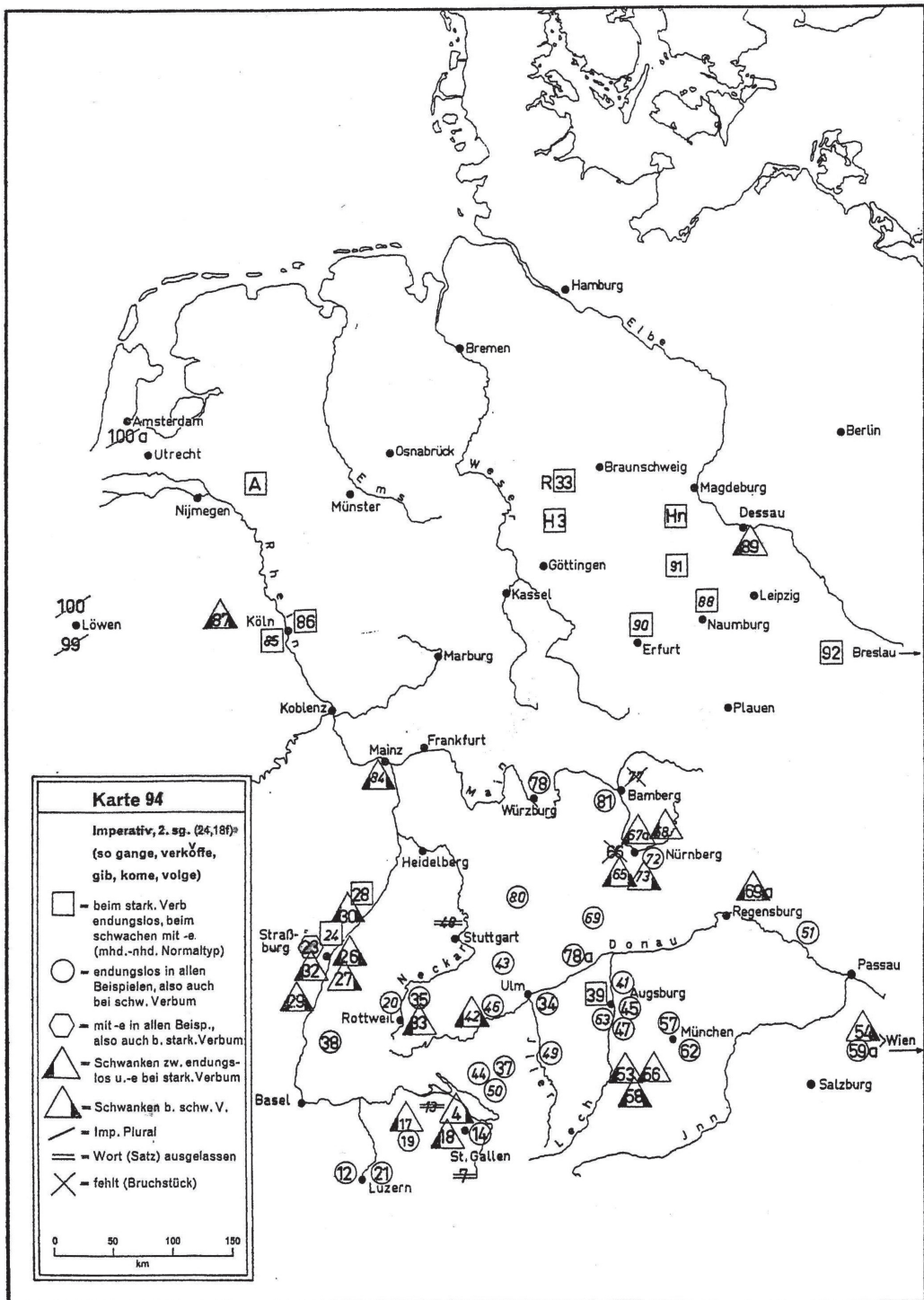
(9) Jhesus aber sprach. So verdamne ich dich auch nicht. Gehe hin vnd sündige fort nicht mehr. (Luther: Johannes 8. 11, S.260)

イエスは言われた。私もあなたを罰することはしない、帰りなさい、そしてもう  
今後は罪をおかさないようにしなさい。

ここではハンス・ザックスとは逆に強変化動詞の gehen を含め、すべてに -e が付いている。通時的には -e は本来テーマ母音の反映で、語幹の一部であると考えられるものが、強変

化動詞に -e が付くことで変化語尾のように解釈されるようになる。

## DARSTELLUNG DER EINZELPROBLEME



(Werner Besch (1967) : Sprachlandschaften und Sprachausgleich im 15. Jahrhundert.  
 München, S.307 より。)

(8)

ドイツ語命令形の形態について

#### 4. 17～18世紀のドイツ語の2人称単数の命令形の形態

ハンス・ザックスやルターは16世紀であるが、高田(2013: 209f.)は、17世紀の文法家の文典において2人称単数の命令形が *lieb* / *liebe* のように *-e* なしと *-e* 付きが併記され

ていることに触れている。これは17世紀の作品を少し見れば明らかになる。ここではグリンメルスハウゼンの『阿呆物語』(1669年)の最初の箇所をみてみよう。<sup>(13)</sup>

- (10) Mein Sohn, schweig, ich tue dir nichts, sei zufrieden. (I. Buch, 7. Kap., S.32)

息子よ、黙りなさい、私はなにもしないから、恐がるな。

- (11) Ach liebes Kind, schweige und lerne, solches ist dir viel nötiger als Käs.

(I. Buch, 8. Kap., S.37)

ああ息子よ、黙って学ぶんだ、そのほうがおまえにはチーズより必要だ。

- (12) >Bleib nur<, sagte der Einsiedel, >es ist noch keine Gefahr vorhanden.<

(I. Buch, 10. Kap., S.43)

「慌てなくてもよい、まだ心配ないから。」と隠者は言った。

- (13) >Liebster Sohn< sagte er, >vor allen Dingen bleibe standhaftig...<

(I. Buch, 12. Kap., S.49)

「息子よ、わけても自分の心をしっかりとみつんだよ。」と隠者は言った。

- (14) Aber laß hören, wie pflegst du zu beten? (II. Buch, 13. Kap., S.166)

お前がどのように祈るか、聞きたいものだ。

- (15) Ach nein, mein Sohn, lasse mich fahren.. (I. Buch, 12. Kap., S.48)

いや、いや、息子よ私を行かせてくれ。

上記のようにわずかに最初の箇所をみるだけでも同じ動詞の2人称単数の命令形が *-e* なしであったり (*schweig*, *bleib*, *lass*)、*-e* 付きであったりする (*schweige*, *bleibe*, *lasse*)。

グリンメルスハウゼンの『阿呆物語』第1冊の動詞の命令形をみると以下のものである。

*-e* なし : *sag*, *lauf weg*, *quack*, *komm*, *schweig*, *laß*, *lob*, *sprichsprich*, *gib*, *erlös*, *bleib*, *halt*, *fahr*, *schlag*, *zerreiß*, *hol*, *strick zu*, *bring*, *nimm*

*-e* 付き : *walte*, *verleihe*, *höre*, *schweige*, *lerne*, *esse*, *gehe*, *wehre*, *berichte*, *lasse*, *folge*, *bleibe*, *stehe auf*, *leiste*, *schnarre*, *schieße nieder*, *errette*, *habe*, *befleißige dich*, *bedebke*, *tue*, *siehe*, *empfahe*

ここでは (i)e 型の動詞 (*sprich*, *gib*, *nimm*) などでは *-e* なしであるが、ルターの場合のように、弱変化動詞はもとより、強変化動詞も *-e* 付きであったり、両方で用いられたりしている。

さらに18世紀に関しては、レッシングの『賢者ナータン』(1779年)に現れる2人称単数の命令形でみてみよう。<sup>(14)</sup>

- e なし : sag, nimm, schweig, horch, sieh, geh, lass, fühl, komm, meld, zahl, mach, schilt, borg,  
versprich, verdieb, erzähl, besinn, trau, tritt, sprich, denk, versteh, halt, verzeih, hol,  
leg, brauch, erklär, verschweig, pfleg, such, bring, schick, trag, gib, steh auf, lenk ein,  
nenn, vergib, beschäm tu, bekenne, fahr, hör usw.
- e 付き : töte, martere, glaube, eile zu, verzeihe, warte, sage, rede, borge, trage, sperre, gebiete,  
teile, spiele, Sorge, habe, übe, belone, frage, bereite usw.

sag, sage, borg, borge, verzeih, verzeihe など両方に使われているものがある。また(i)e型の動詞 (nimm, sprich, gib) はもとより、不規則動詞は、ほぼすべて -e なしである。

さらに horch, zahl, mach などの規則動詞も -e なしになっている。多くに -e が付いていたグリーンメルスハウゼンの『阿呆物語』とは対照的である。-e 付きは規則動詞が中心で、特に語幹が ern で終わる動詞や -d, -t で終わる動詞である。

現代ドイツ語の成立に大きな役割を果たしたルターは、すでに触れたように最初は南ドイツの傾向を示したが、後に中部ドイツの形になり、1545 年の聖書は -e 付きになっている。Besch によれば、ルターの 1545 年の聖書におけるこの使用により「簡略さという命令文の性格に本来矛盾し、それゆえ日常言語では引き続き避けられる命令文にお

ける -e の導入は特に書き言葉の現象 Besch (1967:309)」になる。このように書き言葉では i(e) 型の不規則動詞などを除き -e 付きが一般的になるが、一方また単純化という言葉使用の一般法則、モーザーのいう言語的経済性 (sprachliche Ökonomie) により<sup>(15)</sup>、語尾の -e は省略されるようにもなる。全体を見るにはより詳しい調査、検討が必要であるが、『阿呆物語』はまだルターを引き継いだ -e 付きのタイプ、演劇という会話文である『賢者ナータン』は -e なしのタイプになっているといえる。

## 5. 現代ドイツ語の 2 人称単数の命令形の形態

現代ドイツ語において語幹だけで命令文を作るのか、語幹に -e を付けるのかは以下の通りである。<sup>(16)</sup>

### 1. -e を付けない動詞 (e-lose Form)

#### 1) (i)e 型の動詞

geben → gib!, helfen → hilf!, nehmen → nimm!, sprechen → sprich!, lesen → lies! usw.

例外 sehen → sieh!, siehe!<sup>(17)</sup>, sein → sei!, werden → werde!

#### 2) lassen → lass!

### 2. -e を付ける動詞 (e-haltige Form)

#### 1) 語幹が -dm, -tm, -gn, -chn 等で終わる複子音のもの。これらの動詞はどんな場合にも -e がつき、-e はむしろ語幹の一部とも考えられる。

widmen → widme!, atmen → atme! leugnen → leugne!, rechnen → rechne!,  
öffnen → öffne! usw.

#### 2) -eln, -ern, -igen で終わる動詞。-eln, -ern の場合語幹 eler の e を落とすことがある。<sup>(18)</sup>

sammeln → samm(e)le!, wandern → wand(e)re!, entschuldigen → entschuldige!

3 -e を付ける動詞が一般的、ただし -e なしも可能<sup>(19)</sup>

語幹が -d, -t で終わる動詞

reden → redet!, schneiden → schneidet!, arbeiten → arbeitet!, warten → wartet!  
 red!                      schneid!                      arbeit!                      wart!

4 どちらも可能な動詞 (多くの動詞がこのタイプ、現在では、特に口語の場合 -e なしの場合が多い)

kommen → komm!, gehen → geh!, tragen → trag!, lernen → lern!  
 komm!                      geh!                      trag!                      lern!

2 人称複数の命令形は、現在形と同じく語幹 + t で表す。ただし 2 人称単数の場合と同様に語幹が -d, -t で終わるもの、あるいは語幹が -dm, -tm, -gn, -chn に終わる複子音のものは口調上の e を入れて -et になる。

reden → redet!, warten → wartet!, atmen → atmet!,

現在のドイツ語で i(e) 型の不規則動詞などの -e なし、語幹が -dm, -tm, -gn, -chn 等で終わる動詞の -e 付き（これは語幹の一部とも考えられる）を除くと、多くの動詞は不規則動詞であれ、規則動詞であれ、-e 付き、-e なしの両方で使われている。そしてこの -e 付きか、-e なしかは、文法書などでは標準語 (Hochsprache) は → e 付き、言語の経済性が発揮される話し言葉 (Umgangssprache) では → e なしで捉えられることが多かった。

それに対して、小説などにおいて口語的な描写でなくても -e なしが多く用いられることから、-e なしの理由を話し言葉に見ることに疑問を呈し、この問題を文体的視点から解釈したのが Bosmanszky (1976) である。<sup>(20)</sup> Bosmanszky の考察の要点を簡単に述べれば、1. 不安、興奮、怒りなどの感情の働きによってなされる強調の命令文では -e なしになる。急ぎの要求の場合も同様 -e なしである。2. それに対して、特に注意の喚起や

説得を目的とした場合のように、言葉をより長く耳に残しておく際は -e 付きが好まれる。

3. ただし、強調もなく、落ち着いた提案や命令にでも - 多分言語的な経済性が働き -e が省略されることもある。Bosmanszky は多くの事例で自説を展開しているが、3 の場合に見られるように例外も多々あり、標準語と話し言葉による使い分けの説明と同様に、-e 付き、-e なしの一つの方角性は示してはいなくても、明確な原理とは言えないであろう。

これに対して Donhauser (1986: 69) は、ドイツ語の 2 人称単数の命令形における -e なしと -e 付きの形態の並存は、標準形か、そのヴァリエーションとしても例外形か、という区別ではなく、二つの独立した形成原理の競合とする。したがって Donhauser によって例示される図 (次ページ) も、標準形 (例えば -e 付き) から、-e なしが作られるのではなく、語幹のみによる形成原理がなお活きている相互の形成原理の重なりのプロセスとして提示されている。つまりドイツ語の場合、多くの動詞には異なる形成原理に基づく二つの形態があるということである。これを図示すると以下ようになる。



	形成原理	不規則動詞		規則動詞	
新高ドイツ語	II. 語系変化による形成	→	<div>- e</div> <div>komme      sage</div> <div>gehe      lerne</div>		
	I. 語幹のみによる形成	→	<div>gib</div> <div>nimm</div> <div>lies</div>	<div>Ø</div> <div>komm      sag</div> <div>geh      lern</div>	<div>rechne</div> <div>atme</div> <div>sammle</div>

## まとめ

これまでの考察結果を整理してみよう。ドイツ語では、2人称単数の命令形だけが、独自で、-(e)stの語尾をもつ直説法や接続法の2人称単数形と区別される。その際二つの異なる形態がある。古高ドイツ語や(古典期の)中高ドイツ語においては2人称単数の命令形は、強変化動詞で語尾なし、一部の強変化動詞や規則動詞ではテーマ母音(古高ドイツ語)や-e(中高ドイツ語)で終わるという規則があった。ところが初期新高ドイツ語の時代になると、一方には語末音消失により弱変化動詞に-eなしが現れ、他方では語末音添付により強変化動詞に-e付きが現れるようになる。その際中部ドイツ地域は基本的に中高ドイツ語の規則に沿っているが、南ドイツは語末音消失で規則動詞でも-eなしが顕著になる。ルターの1545年の聖書訳は-e付きで、その後2人称単数の命令形は、(i)e型の動詞などを除き、-eを付けるのが書き言葉では一般的になるが、言語的な経済性の傾向から話し言葉などでは-eが省略されることも多く、現代ドイツ語では(i)e型動詞の-eなし、-dm、-tm、-gn、-chnで終わる動詞の-e付きを除くと、どちらにでも用いられる動詞が多い。-e付きか-eなしかは、文法書などでは「標準語(-e付き)」対「話し言葉(-eなし)」で説明されたり、Bosmanszky (1976)のように文体的視点から考察されたりするが、それらは一つの方向性は示しているが、それらは一つの方向性は示しているが、説得力のある説明とは言えず、Donhauserは

これらを異なる形成原理に基づく二つの形態とする。

## 註

- (1) 不定詞語尾-enをもつ少数の強変化動詞(例えばbitten)は、弱変化動詞の第1類と同じ語形変化をし、2人称単数の命令形はbitiで、母音で終わる。高橋(1994: 69)参照。
- (2) Braune / Eggers (1987: 255f.) 参照。なお、変化表は同書256ページと257ページの間に挿入されたParadigmen der starken und schwachen Verba(強変化動詞と弱変化動詞の語形変化表)によっている。
- (3) 複数1人称の命令形、いわゆる勧誘表現(Adhortativ)に関しては本稿では扱わない。この点に関しては、拙稿「ドイツ語における勧誘表現について」『言語と文化』愛知大学語学教育研究室 第37号 2017年 参照。
- (4) Braune / Eggers (1987), a.a.O. S.256f.、高橋(1994: 70f.) 参照
- (5) Donhauser (1986: 65) 参照。
- (6) テキストはOskar Erdmann編のOtfrieds Evangelienbuch (1973)により、邦訳に関しては新保(1993: 50f.68,80)の注釈と訳を参考している。
- (7) 古高ドイツ語ではwesan (sein)には命令法単数形wisと複数形wesetがあるが、sinには命令法の形態はない。古高ドイツ語、中高ドイツ語のsin / wesan, wesen (sein)の直説法現在形、接続法I式の人称変化と命令形は以下の通りである。(次ページ) Braune / Eggers (1987: 302f.), Paul / Wiehl / Grosse (1998: 271)、高橋(1994: 82, 173)、古賀(1979: 20, 142)、浜崎(1986: 123)、Bergmann u.a. (2016: 212, 222)など参照。初期新高ドイツ語に関してはBesch (1967: 309ff.) 参照。

(12)

ドイツ語命令形の形態について

		古高ドイツ語		中高ドイツ語	
直・現・単		sîn	wesan	sîn	wësen
	1.	bim, bin	wiso	bin	wise
	2.	bist	wisis	bist	
	3.	ist	wisit	ist, is	
	複	1. birum, umēs		birn, sîn, sint	
		2. birut		birt, sît, sint	
		3. sint	wesent	sint, sîn	
接・I・単	1.	sî		sî	wëse
	2.	sîst	wesēs	sîs(t)	wësest
	3.	sî	wese	sî	wëse
	複	1. sîn	wesên	sîn	wësen
		2. sît	wesêt	sît	wëset
		3. sîn	wesên	sîn	wësen
命	単	2. Ø	wis	bis	wis
	複	2. Ø	weset	sît	wëset

- (8) 中高ドイツ語の変化表に関しては Paul / Wiehl / Grosse (1998: 238f.), Walshe (1980: 23ff.), 古賀 (1979: 82, 113), 浜崎 (1986: 120f.) などを参考にしている。
- (9) Hartmann von Aue: *Der arme Heinrich*, Stuttgart (Reclam), 2013 より引用。
- (10) Besch (1967: 307) の言語地図 94 をそのまま借用、転載したものである。
- (11) Hans Sachs: *Das heiße Eisen*, In: *Meisterlieder, Spruchgedichte, Fastnachtsspiele*, Stuttgart (Reclam), 2011, S.112f. 邦訳は藤代・岡田・工藤 (1983: 73) を借用している。
- (12) *Das Neue Testament in der deutschen Übersetzung von Martin Luther, Band 1 Text in der Fassung des Bibeldrucks von 1545*, Stuttgart (Reclam) 1989, S.260.
- (13) Grimmshausen: *Der abenteuerliche Simplicissimus*, Stuttgart (Reclam), 2012. 邦訳は『阿呆物語』望月市恵訳 岩波文庫 (上) 1986 年を参照している。
- (14) Lessing, Gotthold Ephraim: *Nathan der Weise*, Stuttgart (Reclam), 2015.
- (15) Moser (1970: 9, 15), Bosmanszky (1976: 94f.) 参照。
- (16) 鈴木 (2007: 50f.) 参照。
- (17) *siehen* には *siehel* がある。本の参照指示として *Siehe* Seite 18 (18 ページ参照) など慣用的な用法以外に、間投詞的な用法としても用いられる。(16) *Und siehe da..* (Buddenbrooks, S.73) 「そして、どうだろう。」この用法は中高ドイツ語以来頻繁に用いられている。また、ゲーテの作品には「見ろ」という意味で *Siehel* が用いられている。(17) *Siehe Neapel und stirb!!* (ナポリを見て死ね) ゲーテ『イタリア紀行』1787 年 3

月 2 日。なお、逆に *kommen* や *gehen* の間投詞的な用法では *-e* は必ず落ちる。この点は鈴木 (2016) 参照。

- (18) Duden 文法 (2006: 44f.) では、日常言語では *sammell* が可能であると記している。また Donhauser は 2 の 2) の動詞も *-e* なしが可能としているが *kündigl, kündigel*)、実例は未見である。
- (19) *-e* を付けるのが一般的であるが、Donhauser (1986: 62) は文学作品から *-e* なしの例をあげている。ドイツ語母語話者に聞いても一般的ではないが可能とのことである。
- (20) Bosmanszky (1976: 89ff.), Donhauser (1986: 67f.) 参照。

### 使用テキスト

- Das Neue Testament in der deutschen Übersetzung von Martin Luther, Band 1 Text in der Fassung des Bibeldrucks von 1545*. Stuttgart (Reclam) 1989.
- Grimmelshausen: *Der abenteuerliche Simplicissimus*. Stuttgart (Reclam), 2012.
- Hartmann von Aue: *Der arme Heinrich*. Stuttgart (Reclam) 2013.
- Lessing, Gotthold Ephraim: *Nathan der Weise*. Stuttgart (Reclam) 2015.
- Mann, Thomas: *Buddenbrooks Verfall einer Familie*. Frankfurt am Main (Fischer Taschenbuch Verlag) 1996.
- Otfrids Evangelienbuch, Herausgegeben von Oskar Erdmann, besorgt von Ludwig Wolff. Tübingen (Max Niemeyer Verlag) 1973.
- Sachs, Hans: *Das heiße Eisen*, In: *Meisterlieder, Spruchgedichte, Fastnachtsspiele*. Stuttgart (Reclam) 2011, S.102-115.



## 参考文献

- Behaghel, Otto (1924) : *Deutsche Syntax Eine geschichtliche Darstellung Band II*. Die Wortklassen und Wortformen. Heidelberg.
- Bergmann, R./ Moulin, C. und Ruge, N. (2016) : *Alt- und Mittelhochdeutsch. Arbeitsbuch zur Grammatik der älteren deutschen Sprachstufen und zur deutschen Sprachgeschichte*. 9. korrigierte Auflage. Göttingen.
- Besch, Werner (1967) : *Sprachlandschaften und Sprachausgleich im 15. Jahrhundert, Studien zur Erforschung der spätmittelhochdeutschen Schreibdialekte und zur Entstehung der neuhochdeutschen Schriftsprache*. München.
- Bosmanszky, Kurt (1976) : *Der Imperativ und seine Stellung im Modalsystem der deutschen Gegenwartssprache. Untersuchungen über Ausdrucksmöglichkeiten der Aufforderung*. masch. Dissertation Wien.
- Braune, Wilhelm/ Eggers, Hans (1987) : *Althochdeutsche Grammatik*. Tübingen.
- Donhauser, Karin (1986) : *Der Imperativ im Deutschen. Studien zur Syntax und Semantik des deutschen Modussystems*. Hamburg.
- Duden (2006) : *Die Grammatik*. 7., völlig neu erarbeiteten und erweiterten Auflage. Mannheim/ Leipzig/ Wien/ Zürich.
- Ebert, R.P./ Reichmann, O./ Solma, H.-J./ Wegera, K.-P. (1993) : *Frühneuhochdeutsche Grammatik*. Tübingen.
- Erdmann, Oskar (1886) : *Grundzüge der deutschen Syntax nach ihrer geschichtlichen Entwicklung*. Erste Abteilung. Stuttgart.
- Moser, Hugo (1970) : Probleme der sprachlichen Ökonomie im heutigen deutschen Satz. In: Sprache der Gegenwart, Bd. 6: *Studien zur Syntax des heutigen Deutsch*. Düsseldorf, S.9-25.
- Paul, Hermann (1958<sup>4</sup>) : *Deutsche Grammatik Band IV*. Halle (Saale).
- Paul, H./ Wiehl, P./ Grosse, S. (1998) : *Mittelhochdeutsche Grammatik*. 24. Aufl. Tübingen.
- Tschirch, Fritz (1969) : *1200 Jahre deutsche Sprache in synoptischen Bibeltexten*. Berlin.
- Walshe, M.O'C. (1980) : *A Middle High German Reader with grammar, notes and glossary*. Oxford.
- 古賀允洋 (1979) : 『演習 中高ドイツ語文法』 大学書林。
- 藤代幸一・岡田公夫・工藤康弘 (1983) : 『ハンス・ザックス作品集』 大学書林。
- 浜崎長寿 (1986) : 『中高ドイツ語の分類語彙と変化表』 大学書林。
- 浜崎長寿・野入逸彦・八本木薫著 (2008) : ドイツ語文法シリーズ4『動詞』 大学書林。
- 萩野蔵平・齋藤治之編著 (2005) : 『ドイツ語史小辞典』 同学社。
- 鈴木康志 (2007) : ドイツ語命令・要求表現のさまざまな形態について - 『ブデンプローク家の人々』を例として - 『言語と文化』(愛知大学語学教育研究室) 第17号 49～71ページ。
- 鈴木康志 (2016) : 要求を表さない命令文 - 交話的 (phatisch) な用法を中心に - 『言語と文化』(愛知大学語学教育研究室) 第35号 1～15ページ。
- 新保雅浩 (1993) 『古高ドイツ語 オトフリートの福音書』 大学書林。
- 高田博行 (2013) : 「正しい」ドイツ語の探求 (17世紀) 文法家と標準文章語の形成  
高田博行・新田春夫編『ドイツ語の歴史論』講座ドイツ言語学 第2巻所収  
199～223ページ。
- 高橋輝和 (1994) : 『古期ドイツ語文法』 大学書林。